特集　下関の文学者

今年３月、下関市を拠点に活動した直木賞作家の古川薫さんに、下関市名誉市民の称号が贈られました。下関市には、その他にも素晴らしい作品を残された多くの作家がいます。今回の特集は、下関出身の文学者を紹介します。

古川　薫

地元下関での輝かしい功績

昨年5月に92歳で亡くなった下関市出身の直木賞作家である古川薫さん。下関市を拠点に活動し、生涯で約130冊の著作を手掛けました。40歳の時に発表した「走狗」が直木賞の候補となり、その後、平成3年(1991)、65歳のときに「漂泊者のアリア」で直木賞を受賞しました。初候補から25年の歳月を経て、最多候補回数(10回)、最高齢(当時)での受賞でした。

直木賞受賞後も上京することなく下関に腰を落ち着け、幕末に四カ国連合艦隊に接収された長州砲の返還運動や、藤原義江、田中絹代の顕彰活動を行いました。さらに、文筆業をこなす一方で、各種の文学フォーラム参加、市内各地に文学碑や彫刻を設置するなど、多方面にわたる文化事業にも精力的に従事しました。今年3月、古川薫さんの数々の功績を称え下関市名誉市民の称号が贈られました。

元文藝春秋編集者
岡崎 正隆さん

古川薫さんの32作品を手掛け、直木賞受賞作「漂泊者のアリア」も担当した文藝春秋の元編集者、岡崎正隆さんに話を伺いました。

早筆で格調高い文章

初めて会ったときの印象は、「この人だったらいつまでも付き合っていられるな」と感じました。実際に仕事やプライベートでも長くお付き合いしました。下関へは200回以上来ています。手紙のやり取りは100通以上。古川さんからは速達ですぐ返事がくる、とてもまめな人でした。

初めて古川さんの文章を読んだ時は、文章が格調高いと感じました。古川さんは新聞社時代、新聞の原稿800字を6年間書いていましたが、当日締め切り間際に一気に書いていたそうです。一回目の直木賞候補作品である「走狗」も、原稿を1日で書き上げました。書くのが早くて文章の格調が高く乱れないというのは天性の資質だと思います。

直木賞受賞作「漂泊者のアリア」

「漂泊者のアリア」では、単行本化にあたり古川さんに5回手直しをしてもらいました。これほど手直しをしてもらったのは、この作品だけでした。書き出しの部分がとても素晴らしいですね。古川さんは、10回目の候補で直木賞をもらえなかったら、次は候補になっても辞退すると言われていましたが、私は、古川さんが直木賞をとると確信していました。

下関のホテルで行われた直木賞受賞祝賀会には、地方にも関わらず、600人もの人が集まりました。これだけの人が集まったというのは他に聞いたことがありません。注目度の高さと、多くの方に慕われていた古川さんの人柄によるものだと思います。

多才・多趣味な人間性と魅力

古川さんは、多趣味・多才な人で、油絵、作詞作曲、居合、焼き物、相撲や水泳、映画鑑賞など、興味の幅が広い人でした。人と話をするのが楽しみで、酒と旅行が好きなところが古川さんと私の共通点でした。直木賞受賞の1カ月前に、古川さんが65歳でホノルルマラソンを走ったときの伴走者が私でした。古川さんは見事完走し、しかも、完走後すぐに雑誌に完走記の原稿を書いて、ファクスで送っていたことには驚かされました。

海峡のまちと人を愛した人

東京へ出て行く作家が多い中、古川さんはずっと下関に住み続けました。幕末期を中心に下関を舞台にした作品を多く残した古川さんにとっては、下関は資料の宝庫であり、地元下関のことを大切に思われていたのではないでしょうか。

「文学とは、文学の根底にあるものとは、人を愛するものでないといかん。」

（2012年5月 田中絹代ぶんか館において）

▲直木賞受賞会見の様子　　写真提供：吉岡 一生

著：古川薫
発行元：文藝春秋

漂泊者のアリア

第104回直木賞受賞作。「われらのテナー」と呼ばれ、世界的に活躍した混血のオペラ歌手・藤原義江の生涯を描いたこの作品は、人物像と時代を鮮やかに浮かび上がらせた描写力と、冷静でありながら温かみのある文体が評価され、選考にあたる作家からほぼ満票で選出され、受賞となった。

古川薫さんの妻　香代子さん

わが家での古川　薫

古川は書斎で、毎日、深夜2時頃まで執筆していました。生活の中心は執筆活動でしたが、うまくペンが進まないときなど、よく私を食事や映画に誘いました。ときには、仕事について感想を求められることもあり、正直に思ったことを伝えると、素直に受け入れる人でもありました。

直木賞受賞の電話は、一人で書斎にこもって待ち、私は扉の外で待機していました。扉が開いて、古川が両手を差し出し、「うん、うん」と、それだけ言い握手しました。10回目の候補での受賞で古川は心底ほっとしたのでしょう。家の中は満員電車のようにたくさんの関係者の方が来られていたのを覚えています。良い友人に恵まれ、下関を離れることなく、ただひたすらにペンを執って来た古川の生涯は幸せだったように思います。

下関市立近代先人顕彰館
田中絹代ぶんか館

開館時間：午前9時30分～午後5時
休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
☎250-7666
FAX231-0469

●あなたの言葉を古川薫さんの記念誌に載せませんか

古川薫さんの記念誌を作成するにあたり古川さんに関する「ひと言コメント」を募集します。(180字以内)
対中学生以上　申6月4日～7月31日(消印有効)に、所定の応募用紙を直接か郵送、ファクス、Eメールで田中絹代ぶんか館(〒750-0008市内田中町5番7号　✉info@kinuyo-bunka.jp　FAX231-0469)へ。※応募用紙は、市ホームページか田中絹代ぶんか館ホームページ、各支所、各総合支所地域政策課、各図書館に設置
問文化振興課(☎231-4691)

毛家村(けやむら)さん　大住(おおすみ)さん
下関西高等学校　文芸部

下関の作家の本がおもしろい。多くの人に読んでほしい。

下関の作家を身近に感じる

山口県立下関西高等学校文芸部の毛家村さんと大住さんに話を伺いました。「小学生のときにタイトルのインパクトの強さに興味をもって、田中慎弥さんの『共喰い』を読んだのが下関の作家との出会いでした。後になって下関出身の作家であることを知って驚きました」と大住さん。

「最近、林芙美子さんの『放浪記』と古川薫さんの『吉田松陰』『松下村塾』を読みました。最も尊敬する人の一人が吉田松陰なので本に熱中しました」と話す毛家村さん。地元である下関を舞台とした小説は、土地勘もあり身近に感じることができるとのこと。

田中絹代ぶんか館に学校のオリエンテーションで訪れたときは、下関の作家の多さに驚いたという大住さん。「自分が読んだことがある本や、聞いたことがある有名な作家が下関出身であることが分かり勉強になりました」

2人とも作家志望で、学校の文芸誌には連載をもっており、本の出だしの部分や表現など、とても参考になると話します。

「本を読むのが苦手な人は、詩から入ると読みやすくていいと思います」と大住さん。毛家村さんは「下関には有名な作品を書いた作家がたくさんいます。読めば下関への愛着も湧くと思うんです。お薦めしたいです」と笑顔で話してくれました。

下関ゆかりの先人たち

古川薫さんが名誉館長をしていた田中絹代ぶんか館では、下関出身の文学者などの業績やゆかりの品々が展示されています。また、市内の図書館では、多くの下関の作家の本を読むことができます。ぜひ、皆さんも下関にゆかりのある文学者の作品を読んでみてはいかがですか。

問文化振興課(☎231-4691)

中央図書館　下関所縁の作家コーナー

そうだ！図書館へ行こう

問中央図書館
(☎231-2226)

中央図書館4階に、「ふるさと下関インフォメーションコーナー」があります。下関市を知るきっかけとなる情報を集めており、観光や地域産業などはもちろん、下関市ゆかりの人物に関する図書も読むことができます。古川薫さんをはじめとする、下関市ゆかりの作家の作品の一部も「下関所縁(ゆかり)の作家コーナー」として、並べています。そのほか下関市に関する情報を調べたい方は、中央図書館の「ふるさと下関インフォメーションコーナー」へお立ち寄りください。

下関ゆかりの文学者の紹介

林 芙美子

写真提供：新宿歴史博物館

明治36年（1903）12月31日～
昭和26年（1951）６月28日
下関市田中町生まれ

昭和３年女流文芸誌「女人芸術」に連載した「放浪記」で一躍流行作家となる。戦時中は報道班員として活動。

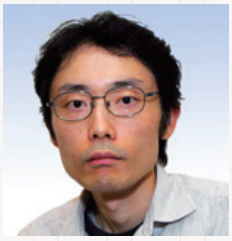
著　作

「放浪記」昭和５年（1930）
「浮雲」昭和26年（1951）
「晩菊」昭和26年（1951）

「現代日本文学館30 堀辰雄・林芙美子」
著：堀辰雄・林芙美子
発行元：文藝春秋

林芙美子「清貧の書」集録。一組の夫婦のつましい生活と情愛を描いた作品。芙美子が後に籍を入れることとなった、手塚緑敏と同棲を始めた頃のことを基に描き出されている。

田中 慎弥



昭和47年（1972）11月29日～
下関市綾羅木生まれ

20歳頃から小説を書き始め、４作品が芥川賞の候補となり、「共喰い」で第146回芥川賞を受賞。

著　作

「冷たい水の羊」平成17年（2005）
「図書準備室」平成19年（2007）
「切れた鎖」平成20年（2008）

「共喰い」
著：田中慎弥
発行元：集英社

閉鎖的な地方都市に暮らす17歳の少年の鬱屈した姿と、凄惨なまでの父子のせめぎ合いが発展から取り残された町の姿と絡み合って描かれた作品。

赤江 瀑

昭和８年（1933）４月22日～
平成24年（2012）６月８日
下関市宮田町生まれ

日本の伝統美や土俗的視野を取り入れ、独特の文学世界を構築した世界観は「赤江美学」と称賛された。

著　作

「罪喰い」昭和49年（1974）
「金環食の影飾り」昭和50年（1975）
「オルフェの水鏡」昭和63年（1988）

「海峡 -この水の無明の眞秀ろば」
著：赤江瀑
発行元：白水社

友人Ａの追懐に始まり、小野小町伝説の検証、海難者に対する土着的なおきてなど「海峡」の破片をつづる。「海峡」を軸に随筆と虚構世界とを交錯させた作品。

豊田 行二

昭和11年（1936）５月11日～
平成８年（1996）11月７日
下関市丸山町生まれ

昭和43年（1968）「示談書」で第59回直木賞候補。政治小説、推理小説、官能小説など各分野で多彩な筆を振るう。

著　作

「だれも知らない」昭和45年（1970）
「小説示談書」昭和55年（1980）
「作家前後」昭和57年（1982）

「消えた三億円」
著：豊田行二
発行元：三一書房

東京都府中市で三億円が盗まれるという事件があった。政治家への、企業側からのリベートとして盗まれたのではないかと、主人公の新聞記者を通して独自の推理を展開した作品。

長谷川 修

大正15年（1926）３月８日～
昭和54年（1979）５月１日
下関市上田中町生まれ

「真っ赤な兎」「孤島の生活」「哲学者の商法」「まぼろしの風景画」の四作品が芥川賞候補となる。

著　作

「真っ赤な兎」昭和39年（1964）
「ふうてん学生の孤独」昭和44年（1969）
「住吉詣で」昭和55年（1980）

「まぼろしの風景画」
著：長谷川修
発行元：新潮社

「まぼろしの風景画」「哲学者の商法」など、芥川賞の候補に挙がった２作を含む短編集。少年時代を振り返り、己の内に降り積もった寂寞の原因を吐露していく物語。

船戸 与一

昭和19年（1944）２月８日～
平成27年（2015）４月22日
下関市後田町生まれ

「虹の谷の五月」で第123回直木賞を受賞。冒険小説に限らず、ルポルタージュ、劇画の原作を著す。

著　作

「山猫の夏」昭和59年（1984）
「猛き箱舟（上・下）」昭和62年（1987）
「砂のクロニクル」平成３年（1991）

「虹の谷の五月」
著：船戸与一
発行元：集英社

セブ島に暮らす13歳のトシオは、「虹の谷」への行き方を知っている唯一の人間だった。フィリピンの内紛を背景に、悲憤や哀切を胸に沈め、少年が成長していく様子を描いた冒険小説。